

■日時 平成26年8月22日(金) ■天候 晴れ

天理高校 対 愛知県立愛知工業高校

■球場 大田スタジアム 第1試合 5回戦 決勝 ■試合時間 1時間50分 ■備考

■審判 球審:家田 塁審:渡辺 伊藤 宇田川

出場校名	代表地区	1	2	3	4	5	6	7	8	9					計	安	失
愛知工	東海・愛知	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0	3	1
天理	近畿・奈良	0	0	0	0	0	2	0	0	×					2	3	0

愛知工

	ポジション	氏名	打	得	安	点	1	2	3	4	5	6	7	8	9			
1	投	伊藤 将宏	4	0	0	0	遊飛		二ゴ			三振		三ゴ				
2	遊	関 洋晃	4	0	0	0	二ゴ		三振			中飛			二ゴ			
3	中	大塚 直樹	4	0	0	0	遊ゴ			投ゴ		三振			遊ゴ			
4	捕	佐藤 雅大	4	0	1	0		左安		三ゴ			遊ゴ		三振			
5	左	水口 正仁	3	0	0	0		三振		三振				二ゴ				
6	一	横山 和幸	2	0	2	0		右安			中安		死球					
7	三	谷川 旦遥	3	0	0	0		三振			三振		捕邪					
8	右	小野 明	3	0	0	0		二ゴ				捕邪			三振			
9	二	前田 紅麗	3	0	0	0			三振			右飛			右ゴ			
合計			30	0	3	0	残塁:4 併殺:0											
備考																		

■バッテリー

投手	捕手
伊藤 将宏	佐藤 雅大

■投手成績

氏名	回数	打者	安打	三振	四球	自責
伊藤 将宏	8	32	3	9	4	1

天理

	ポジション	氏名	打	得	安	点	1	2	3	4	5	6	7	8	9			
1	右	吉岡 京助	3	1	1	0	二ゴ		四球			中2		一ゴ				
2	三	浅井 慎太郎	3	1	0	0	投ゴ		三振			投選		四球				
3	左	森口 晴信	4	0	2	1			三振		投ゴ		遊安		中安			
4	遊	餘目 晴信	3	0	0	0		左飛		三振		投儀		三振				
5	捕	三好 完太	2	0	0	1		四球		三振		中儀		三振				
6	二	奥村 陽太郎	3	0	0	0		投ゴ			投飛	三ゴ						
7	投	辰己 優貴	3	0	0	0		三ゴ			中飛		中飛					
8	中	奥谷 公紀	2	0	0	0			三振		死球		遊飛					
9	一	氏家 次男	3	0	0	0			三振		三ゴ		三振					
合計			26	2	3	2	残塁:5 併殺:0											
備考																		

■バッテリー

投手	捕手
辰己 優貴	三好 完太

■投手成績

氏名	回数	打者	安打	三振	四球	自責
辰己 優貴	9	31	3	10	1	0

■戦評

大田スタジアムで行われた61回大会の決勝は選手個々の能力の高さを随所で見せ今年も決勝の舞台まで勝ち上がった天理高校とここまで全試合二桁得点を上げる攻撃力を持ち味の愛知工業高校の対決となった。両チームともここまで全試合に先発させている投手に決勝のマウンドを託した。天理先発辰己は130キロを超える速球を武器に力強く投球を愛知工業先発伊藤将は制球の良い変化球を軸に丁寧な投球を続けた。試合は両先発が連投の疲れも見せず持ち味を発揮し決勝戦にふさわしい緊迫した投手戦となった。この試合最初に好機を作ったのは愛知工業であった。2回先頭の4番佐藤が三遊間を破る安打で出塁すると続く水口の三振の間に二盗を決め得点圏に走者を置く。ここで6番横山が右翼への安打で続き一死一三塁と先制の好機を迎える。さらに一塁走者の横山が二盗を決め二三塁としたが後続が三振と内野ゴロに抑えられ先制点を上げられない。5回には先頭の横山が2打席連続となる中堅への安打で出塁すると後続が三振と飛球に倒れ走者を進めることさえできない。両チームこの試合3打席目となる1番打者から攻撃のはじまった6回ついに試合の均衡が破られる。表の愛知工業の攻撃を三者凡退に抑えた天理はその裏先頭の吉岡がチーム初安打となる二塁打で出塁すると続く浅井の打球は投手へのゴロ。この球を素早く三塁に送球するが走者の足が間一髪速く野選となる。この好機に3番森口との間でヒットエンドランを敢行した吉岡が本塁を陥れついに1点を先制する。なお無死一二塁の場面で4番餘目が手堅く犠打で送ると5番三好の中堅への犠飛で1点を追加する。追いつきたい愛知工業であったが辰己の前に自慢の打線が完全に抑え込まれ4回以降二塁を踏むことさえできない。8回裏には四球と安打で一死一二塁のピンチを招くが伊藤将が後続を連続三振に抑え最後の攻撃に望みをつなぐ。しかし9回表マウンドに上がった辰己はこの日最速となる137キロを計測するなど圧巻の投球を見せ最後は4番佐藤を高めの速球で三振に仕留めるとマウンドに歓喜の輪が広がった。あらゆる試合展開でも制してしまう選手個々の能力の高さと精神力の強さを遺憾なく発揮した天理が連覇の数を『8』として4日間の熱戦は幕を閉じた。一方惜しくも準優勝に終わった愛知工業ではあったが下位打線まで長打を打てる攻撃力とそれを引き出す伊藤将のリズムの良い投球は全国二位にふさわしくその戦いで優勝した天理同様に大会を大いに盛り上げたことを最後に記しておく。